消えがての道

森崎和江

森崎和江

消えがての道

花曜社

消えがての道　定価一五〇〇円
昭和五十八年四月二十日　初版印刷
昭和五十八年四月三十日　初版発行
著　者　森崎和江
発行者　林　春樹
発行所　株式会社花曜社
東京都新宿区矢来町三十五番地　郵便番号一六二
電話　東京〇三(二〇七)九七八一
印刷　信毎書籍　製本　東京美術紙工
© Kazue Morisaki, 1983 ISBN4-87346-038-7

目次

第一章　島伝い　5
第二章　消えがての道　37
第三章　尾根を越えて　69
第四章　陽炎の里　89
第五章　森と盆地　117
第六章　波のむこうの　145
あとがき　165

写真　北井一夫
装幀　北嶋廣敏

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

消えがての道

第一章　島伝い

生涯のあいだには、ただ一度通ったきりだという小道は多いことだろう。が、旅先でさえ、またいつの日か歩くと思っているのか、すぐに忘れてしまう。そして生活の小道を、わたしは買物籠をさげて毎日々々歩いてきた。子どもたちが巣立ってその用も薄れた今も、なおひとり買物道を歩いていると、たった一度通ったにすぎない旅の小道が、ふっと鮮やかに浮かんでくる。

そんな小道に、また行ってみると、すっかり様子がかわり、まるで別の町となっていたりする。そして記憶の中の道ばかりありありと浮かんで来て途方にくれることがある。あれは遂に夢の小道か、幻かと、記憶は改められることもなく、いっそう鮮やかになって残ってしまう。それはどこやら消された歴史のように。

現実にはもうどこにもないわたしの、その旅の跡。印象にきざまれただけの風景となってゆく村の道町の道は少なくない。流動しつづける昨今は、生きものさながらに変化する道を、一回きりのティッシュペーパーのように、さよならさよならと歩き、記憶にとどめぬことこそ必要なのかもしれぬ。わたしたちにとって、現存する今は、いつも一回きりのものなのだから。

だから記憶の中の小道は、どれも嘘っぱち。わたしの体温にあたためられ、時間のとど

かぬ空間でまたたく。豆酸の浜辺へ降りてゆく道もその一つだ。わたしの机の上にはすべすべと丸くひらたい、子どものこぶしほどのまっくろな石と、まっしろな石とが置いてある。碁石さながらのなめらかさで、重みがあり、冷たい。二つの石には、昭和三十八年三月二十九日、つしま、つつ浜にてひろう、もりさきかずえ、と書いてある。このまっくろと、まっしろな石たちが、対馬南端の豆酸の浜辺にはびっしりとひろがっていた。今はもうその石の浜辺はないのに。浜に引上げてあった漁船も。

対馬暖流が打ち当るその島の南端には、こんな小石が一面に重なっていて、それはそれは美しかった。どの石も白か黒をしていた。まるで海の大入道の碁石のように。玉石は波にぬれて光り、浜へ下る道は傾斜していた。対馬は海面からたちまち山になっていて平地が少ない。むかしは山を焼いてコバ作でムギやソバを作っていたという。その玉石の浜は平地に乏しい対馬を象徴するかに思われた。

わたしはその石浜へ降りて、腰をおろし、早春の朝陽を浴びた。もう漁を終えた舟が入江に入っていて、夫婦が網をたぐりつつ魚をとりだしていた。絣の短い着物を着た女は笑顔も見せず、夫の漁の少なさをなじるかのように、手荒らに魚をとって石の上に放り、網を竿にひろげかけていく。網に朝陽が光った。

男が魚を活きたまま、石浜の上の板ぎれに横たえて、三枚におろした。その魚の身を渚の波で洗った。また板の上にのせ、刺身にしていった。そして、その場で醤油をかけて食べはじめた。女は太陽にまぶしげに顔をしかめ、口を引きむすんだまま網をかけていく。渋茶色の重そうな網だった。

わたしは男が刺身を作った庖丁が、柄のとれている、さびた、短い出刃であることに驚き、魚を調理した板ぎれもまた、船板か何かの木切れであるのを、じっと見つめた。永年使われた板切れは丸味を帯びていて、浜石のすべっこい光の上に調和していた。

山の岩が波に砕かれ、潮に洗われて、その石浜になるまでの永い年月が、浜に坐っていると海鳴りのまにまにからだに伝わってくる。漁は家族ごとの小舟で行われているらしく、数人の女は網を干し終えると、刺身を食べている男たちに声もかけずに石浜をあがって行った。

浜の上の家並は平家造りで瓦ぶきの軒が寄りそっていた。豆酸は対馬の中では最も九州本土に近い。晴れた日には肥前松浦(ひぜんまつうら)が見えると言い、若者は漁舟で夜の博多に遊びに行く、と言った。が、海に向かってひらけているがここは背後に山々があり、山道を越えて対馬の他の町村と行き交うには不便な所なので、ここばかりが離れ小島のような地域である。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

話しことばも他の村とは違っている、と、城下町の厳原(いずはら)で聞いた。風俗も古風だという。

わたしは家並の中に入り、まっすぐに通っている道を思ったよりもゆったりした道幅だと思いつつ歩いた。大きな家に立寄ってこの土地のことなどを尋ねた。隠居の身だという老人が、神功皇后の伝承や、天道信仰のことを話した。天道信仰は天道山や天道茂(しげ)と呼ばれる霊地を持ち、天道法師を祀る、と語った。天道法師は天武天皇の時代に豆酸で生まれ、海上を飛ぶ霊験あらたかな神通力を持ち、観音の化身であるとのことで、今は神社の形をとっているお堂に案内された。かつて観音堂であったという。わたしは九州の筑豊地帯に天道という町のあったことや、韓国でかつて天道信仰が知識層にひろまっていたという歴史書を読んだことを思いつつ、どこかあっけらかんとしている豆酸の道を歩いた。春先の空は雪曇りとなった。朝の陽の光はすっかり雲に呑まれ、道端で中年の男が三人、立話をしていた。

ここは本家分家の身分差の厳しい地域であった。また、よそものは容易に仲間に加えてはもらえぬ風習があり、日常のつきあいは何事もないのだが、部落内のとりきめなどの場には参加させぬきまりがあった。耕地も持てず、小作権もままならなかった、などという話を聞きながら、そうした村内の不文律によってこの狭い土地は守られ、人は生き継いで

来たものだろうと思ったことだった。

とある小店でパンを買った。バスの停留所で黒い学生服を着た少年と、セーラー服を着た少女が、たがいの母のそばで泣いていた。母親も綿いれの袖なしの背を丸めて、すすりあげつつ、小声で二言三言何か話しては、子の服や髪の形をなおしてやった。母は風呂敷に包んだ荷を握げていた。雪がちらついた。

バスが来た。少年と少女は乗りこみ、窓をあけ、声を放って泣いた。二、三人の友人が来て、テープを握らせた。何事かと思っていたわたしは、ようやくこの子らが本土に集団就職に向かう中学校の新卒者だと了解した。母が、がんばれよ、と泣いた。坂道から子どもの長兄か叔父らしい男が駈けて来て、がんばらんばいけんぞ！　と窓に向かって言った。いやいやをするように子らが泣き声を高めた。バスが、クラクションを軽く鳴らし、ごとりと動き、そして方向をかえて今来た道を港のある厳原へ向けて走り出した。テープがすぐに切れた。

それはわたしが浜の玉石をひろった昭和三十八年三月二十九日の正午のこと。あれからもう二十年。あの少年と少女はどうしたろう。今三十代の働き盛り、時に故郷に帰っていることか。あの日、夕方にかけて粉雪がしきりに降った。豆酸を他の町からへだてている

山々の、地肌がみえる峯にも、まだ芽ぶいていない裸の木がさむざむと傾いている谷にも、流れるように雪が降った。山道は石ころ道で、バスはわたしを乗せ激しくゆれつつ最終便を港町へ向かった。あの日、山肌には、時に炭焼き小屋があったが、もう仕事をしているようには見えなかった。木炭を使わぬ時代に入っていたのだ。

あれから幾ばくもなく玉石の浜は掘られてコンクリートで固められ、防波堤を持つ漁港となったのだ。漁船もやや大ぶりのものとなって船泊りにゆれていた。わたしは腰をおろす場を失ってたたずみ、すこしは暮らしよくなったろうかと眺めた。その二度目の訪問の月日も、季節も心に残っていない。もう捨てられたにちがいない柄のない庖丁を心に見つつ浜の軒下を歩いた。そしてまた性懲りもなく、二、三年のちに三度目の浜に立った。

「ここは美しい浜辺でしたね、あわびくらいの丸い石の……」

わたしは防波堤にいた女に声をかけた。女は漁師の女房らしく陽に焼けていた。

「浜辺？　ああ、むかしのう。じゃりんじゃりん音のひどか石浜じゃったたい。波の打ちかかって風のあるときゃ、船は家の下まで引っぱって来てつなぎよった。それでも波のさらって行きよったばい。今はこの堤と、あの先に防波堤のでけたけん、なんぼかようなった」

「台風のときも大丈夫ですね」
「風は来んばってん、よそ方の船は大型じゃけん、うちらのこまい船は漁にならん」
わたしは舗装された山道をタクシーで厳原の宿へ帰った。この山道の舗装には、福岡県の筑豊炭田で働いていた元炭坑夫が一人加わっている。彼が働くちいさな事務所が、九州各県の道路舗装の下請会社に使われていたからだった。彼は五、六人の男とともに、九州中のあの山この山の中で数カ月をすごし、二、三日家に帰っては、また出かけていた。対馬は幹線道路もまだ舗装されていなかったから、滞在期間は長かった。
「対馬は山ばっかり。木もろくに生えとらん」
彼はたまさかの休みにやって来て、そう話した。
初めての対馬の旅のとき、わたしは随分歩いた。バスが通っている道は途中で降りて、麦畠の中をあてなく歩き、大木が影をおとしているのを眺め、日向にうずくまる女や男にわずかな話を聞き、バス停を幾つか通っては次の便を待った。山の中は対馬のちいさな馬のあとについて歩いた。椿が咲いていた。笹がかぶさっていた。見通しなどまるでない山坂を、枝を払いつつ行く細い道が、隣村へのたった一本の道だった。この坂道を、八歳ほどの女の子が、細枝を背にしょってやって来るのに会った。女の子は背の焚きものを道に

沿って置くようにはすかいにして、わたしを通らせ、すたすたと降りて行った。

その山道がどこの村であったのか、二十年のあいだにわたしは忘れている。つい近年まで覚えていた気がするのだが。道はやや広くなり、木立をひらいて一軒の藁ぶきの家があった。家の前に敷いた莚に干しものがしてあった。陽が射している時間はきっと短いにちがいない山の中の、莚の干しものを老女が手でかきまわしていた。風を当てているのだろう。それは干してうすくなっている切干しのさつまいもだった。

「かんころば持って帰れ。焼くとうまか」

手織り木綿の綿いれでこの人も丸くなっていた。結構です、大切な品を、と恐縮するわたしへ、ぜひとも持って帰れ、かんころは好かんのか、と言う。

「いえいえ、戦争中食べました。あまくておいしかったです」

「あんた、子は居らん？」

「います。小学校に入ったのが二人」

「そんなら持ってけ。土産ば持って帰りゃ子は喜ぼうが。持って帰って遠火でゆっくり焼いて食わせれ。かんころの粉もやろうたい。熱湯で練って食うとうまか。そば粉がよか？そば粉も練って食え」

老女は、そこで待っておれ、と家の中に入り、しばしごそごそと探しものをした。そして皺になった新聞紙をつかんで来ると、莚の上でのばした。紙は黄色くなっていて、あちこち破れていた。新聞紙は貴重品なのだ。何かの折に手に入り、大切に保存していたのだろう。しんとしている山の中でわたしは人家の庭を通るとも知らずに踏みこんだことが悔やまれた。が、他に道はない。

「このかんころは、の、いっぺん湯をかけて干したつ。飴色になっとろうが。よかよか持ってけ。もうしばらくすると新しい芋の出ける。うちの者はみんな山に行っとるけん、わかりゃせんが」

家族は山畠で仕事中なのか、老女はどこかいそいそとさえ見えた。粉も包んでくれた。その粉も莚の上に干してあった。

あれからわたしはどこをどう歩いたか。記憶はぷつりと切れ、一丁田（いっちょうだ）という名の停留所だとか、磯の一軒屋の船大工家族が見えてくる。わたしは坑道でも掘るかのように、この未知の島を歩いていた。坑道は鉱脈にゆきあたるとでもいうのか、とにかくわたしはほしかった、帰るところが。わたしの住むところ、生きるところ、愛し、投げ出し、消滅して悔いないところ……

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com